

《久喜市菖蒲町正眼寺仏像調査報告書》

木造裸形阿弥陀如来立像 一 軀

旧菖蒲町大字柴山枝郷字神ノ木一五二六一 常観堂蔵

久喜市菖蒲町小林四三三五 正眼寺保管

「形状」螺旋粒状。髪際一文字。肉髻珠・白毫相を表す。耳朶現状環ならず。頸部に三道を刻む。鼻穴を表す。左腕垂下し掌を前に向け第一指と第二指を捻じ、右腕屈臂して掌を前に向け五指を伸べ、第一指と第二指を捻じ上品下生の来迎印を結ぶ。正面を向き、やや腰を落とし開脚気味にして、両足先を揃えて蓮華座上に立つ。

光背はなし。台座は蓮華・反花・宝珠勾欄付六角上框座・六角束・六角框座からなる五重蓮華座。

「品質・構造」寄木造、玉眼か、白土地に弁柄漆塗。肉髻珠、白毫珠に水晶嵌入。螺旋切付。

後世の分厚い塗りにより構造の詳細は今ひとつ明らかでないが、頭部左右耳後の線で矧目が見えることから、頭体幹部は前後二材矧ぎとし、内割をするものとみなされる。頭部と体部の接合方法は不明。左右の腕は各々別材とし、右腕は前膊部を別材とするとみなされる。両足先並びに足柄は各々別材とする。両眼は現状彫眼に見えるが、玉眼の可能性あり。

台座は木製、漆箔。

「保存状況」本体表面の粗悪な弁柄漆塗りは近代の後補とみなされる。各所に塗りの割れ、剥落が進み、像の印象を悪くしている。左手第三・五指先端及び右手第三・四指先端部欠失。両足先、両足柄は後補とみなされる。

光背欠失。台座は江戸時代の後補。

「法量」単位センチメートル

像	高	六六・六	髪際高	六一・三	頭頂ゝ顎	一二・一
髪際ゝ顎	七・五	耳	張	九・〇	面	張
面	奥	肩	張	一二・九	臂	張
胸	奥	一一・〇	腹	奥	一一・八	腰
足先開（内）	一・五	（外）	一〇・三			

「製作時代」室町時代

「備考」

一、常観堂本尊。像の伝来、堂の沿革は不詳。堂は別に「阿弥陀堂」、「知足庵」とも呼ばれていた。現在は盗難等の被害を避けるため、本寺の正眼寺に保管されている。

平成一〇年二月二〇日、菖蒲町有形文化財指定となり、久喜市合併後同市指定となり今日に至る。

二、全国的に類例の少ない裸形阿弥陀像の一例。

後世の厚塗りの補修が甚だしいため造立当初の姿はかなり改変されているとみなされる。穏やかな表情を浮かべる和様の来迎阿弥陀立像で、伏眼で丸顔の柔和な面貌、高く盛り上がった肉髻、整然と刻まれた螺旋髪等の表現は平安時代後期に流行した定朝

様式を受け継いでいることを示している。体軀は後世の補修でかなり造立当初の尊容が損なわれているとみなされるが、現状、撫で肩でやや太りじし、胸は偏平で下腹厚く、丸々とした太腿を細めの足首が支えている。側面観は猫背気味、僅かに腰を落として足を開き気味に立つ姿は、裸形像に多く見られる「かたち」といえよう。

裸形阿弥陀像は鎌倉時代から室町時代にかけていくつか造像例があり、県内ではいま一体、旧所沢辻堂伝来裸形阿弥陀立像（県指定・白岡市興善寺蔵）の存在が知られている。端正秀麗な出来栄えをみせる鎌倉時代の美作で、慶派系仏師による一三世紀中頃は降らない頃の製作とみなされる像である。それに比較すると、本像は様式表現や立体構成に類型化がめだち、いささか鄙びた造形がうかがえることから室町時代頃にはいつてからの造立と考えられる。

「所見」

表面の粗悪な塗りは、今後もしび割れ・剥落が進むものと予測されることから、この機会に修理を加えることが望ましい。具体的な修理については、次のような段取りが考えられる。

- 一、X線撮影により、仏体の内部構造等を確認し、修理基本計画を作ること。
- 二、表面の粗悪な塗り（白土地に弁柄漆か）を除去し、本体の素地を現すこと。
- 三、表面の塗りの除去後、必要があれば解体修理を施し、構造的補強を図ること。
- 四、併せて朽損・欠損箇所及び劣悪な後補箇所を除去及び修補・復原等を行うこと。
- 五、以上の作業を通じて得られた知見により、可能な限り造立当初の姿に戻すこと。
- 六、台座は、現状のまま清掃・締め直しを行い、必要があれば光背を新補すること。

（令和四年九月二七日実査

林 宏一

久喜市教育委員会文化財保護課堀内謙一・松村憲治）

